

# 巻頭言

## 生理学の復権を！

慶應義塾大学医学部生理学教授

金子章道

本年春の常任幹事会において本郷利憲先生の後任として庶務幹事に選出され、さらに会則改定に伴いこれまでの庶務幹事は会長と呼ばれることになり、私は日本生理学会初代の会長を務めることになりました。庶務幹事もこれまで日本生理学会を代表する職務ではあったわけですが、何か庶務係として学会の雑用を処理する役目だというニュアンスがありました。勿論名称が会長になったからといってその役目が変わったわけではありませんが、学会代表者というイメージも加わり、外向きには生理学会の存在と考え方をアピールし、内向きには今後の日本生理学会のあるべき方向性を示す責任も出てきたと受け取っております。

率直に言って、まず生理学は一昔前に比べて弱くなったと思います。1950年代から1980年代初頭までは生理学は生物科学領域の最先端にあってそのリーダーシップを取ってきました。現在ではとてもその地位にあるとは言えない現状です。多くの医科大学や医学部において生理学講座が縮小されたり廃止されたりしています。このことはわれわれが研究する場を失いつつあることを意味しています。生理学が失ったポジションは分子生物学や臨床医学領域に奪われてしまいました。その理由はそれぞれの大学や研究機関において生理学の必要性を認めなくなったからです。まずこの現状を阻止し、回復することが現在、生理学に携わる者の急務でしょう。そのためには急速な進歩を遂げた関連領域の研究方法を積極的に取り入れ、

自らの研究を価値の高いものにしなければなりません。また、多くの若手生理学研究者が生理学会よりも他の学会に出席する「生理学会離れ」も緊急な問題です。生理学会の将来計画委員会や学術研究委員会においてもこうした重要な問題を分析し、その解決策を是非見出していただきたいと願います。学会としての努力も大切ですが、最も重要なのは生理学を担当する会員のお一人お一人がこの現状を認識し、自分のおかれた場所で最大の努力をされることだと考えます。会員の皆様の努力を強く期待します。そして、アカデミアの中で生理学の復権を図っていただきたいと思います。

失いつつあるものの中に動物実験環境があります。生理学は「生きている状態をリアルタイムに観察する」ことから始まりますので、その研究に実験動物が必要なことは言うまでもありません。勿論、「生命」を犠牲にして研究を行うのですから、生命に対する尊厳を守り、高度な倫理観の下に研究を行わなければならないことは当然のことです。日本生理学会でも動物実験委員会を中心にいち早く動物実験指針を制定し、世界的レベルの動物実験のルールを設定して、この遵守を会員に求めてきました。また、この春の総会で動物実験委員会は研究倫理委員会と名称を変更し、その対象も研究に伴う倫理問題全体を検討していただく委員会といたしました。世間には動物実験を全く否定する人々が存在しており、国や地方自治体に

働きかけて法律、条令を制定させ動物実験を不可能にする運動を進めています。これまでわれわれはどちらかというと静かに我慢をし、情勢の好転を待っておりましたが、その兆しはありません。現在も国会では「鳥獣保護法」改正の審議が進められております。いまや、生理学研究の社会的な価値を広くPRして世の中に生理学に対する正しい認識と支持を広げる必要があると考えます。数年前に生物科学学会連合も組織され、神経科学学会を始め関連諸学会も一緒にこの問題を考えていただける場が出来つつあります。研究倫理委員会でこの問題を真剣に検討され、また編集・広報委員会では如何にしたら生理学研究を世間から認知され、支持され、期待されるような状況にすることが出来るか、生理学会からどのような情報発信をしたら良いかを考えていただきたいと思いま

す。

今年の春から生理学会の会則が変わり、常任幹事に任期が導入されました。その結果、常任幹事が若返り、各委員会の委員長も大幅に交代されました。このような新しいメンバーによる生理学会の運営はいま始まったばかりですが、その活躍を大いに期待したいと思います。上に掲げた目標に対し生理学会会員の一人一人が努力しなければ生理学は良くなりません。先達が努力して築かれた輝かしい学問領域をもう一度光り輝くものとしようではありませんか。個人個人の努力の集積が生理学の復権につながり、学会はそれをお手伝いするものであると考えております。そして2009年には光り輝く日本生理学会に世界の仲間をお招きし、一緒に生理学の復権を祝いたいものです。